

---

---

## 〈巻頭言〉

沖 田 行 司

本が好きである。本屋がたまらなく好きである。休日の古書店めぐりは、今の若い世代がデズニールランドへ出かけるのと同じぐらい楽しみであった。入手困難な幻の書物を発見したときの驚きと嬉しさというものは何物にも代え難いものであった。財布にお金がないときには、そっとその書物を裏返しにして他人の手に渡らないように小細工をしたものである。翌日、お金を工面して古本屋に駆けつけると、元通りになおされていたこともしばしばである。

図書館は宝の山である。真っ白な図書カードを見ては、大学図書館で最初にその書物を開くことに小さな誇りを覚えたものである。また、多くの貸し出し者が記載されていると、全く見知らぬ人々であるにもかかわらずある種の共同意識というか、親しみをいだいたものである。大学院生になると書庫に入る特権が与えられた。時間があると書庫に入り、時の立つのも忘れたほどであった。ある時、未整理の和本が大量に棚に積まれているのを発見した。新しい図書館が開設されて間もない頃で、収蔵庫には寄贈された書物がそのまま放置されていた。その中の一冊の書物に関心を持った。広島藩の儒者である吉村秋陽の『王学提綱』という書物である。未整理ではあったが、貸し出しを許可してもらった。幕末期の陽明学に関する書物であったと記憶している。読んでゆくと所々に朱書きで書き込みがしてあった。朱書きの書き込みと本文とを対照してゆくと、どうやらそれはキリスト教に関心をもった人物の手によるものと推測できた。後にこの書物は山路愛山文庫の中の一冊として登録された。もちろん朱書きの本人は山路愛山に他ならなかった。

図書館はある時を境に学術情報センターと名称を変えた。しかし、私のよ

うな本好きの人間にとって、書物を単なる情報ととらえる考え方にはいまだに馴染めない。幸いなことに、同志社大学では再び情報センターから図書館に名称が戻ってきた。

近年、大学図書館の利用率は高まり、試験準備やレポートの作成も図書館やPCが必要な情報をすべて準備してくれる。それに比例して学生は本を買わなくなった。どこの大学の書籍の購買部も年々縮小され、極端なところでは教科書かベストセラーしか扱わないところまでであるという。この現象を図書館本来の機能が十分に発揮されていると見るのか、それとも「本を読む」という行為が質的に変容したとみるべきか、親爺の独り言と読み流していただければ幸いである。

(おきた ゆくじ。同志社大学社会学部長)